

## 対話におけるあいづち表現の認定とその問題点について

吉田 奈央

国立国語研究所 /  
東京工業大学大学院  
総合理工学研究科

naou.yoshida@kokken.go.jp

高梨 克也

京都大学  
学術情報メディアセンター

takanasi@ar.media.kyoto-u.ac.jp

伝 康晴

千葉大学  
文学部

den@cogsci.l.chiba-u.ac.jp

### 1 はじめに

コーパスを用いた研究においては、分析の基本となる単位を目的に応じて適切に設定し、揺れのないように認定することが、分析の信頼性（分析結果に偏りが無い）や再現性（他の研究者が比較のために同等の分析を遂行できる）を保証する上で必要要件となる。とくに対話研究においては、談話の流れや他者との相互作用の中で発話が果たす役割を明らかにすることがとりわけ重要であり、そのためには、発話のレベルに関して単位や機能を認定する必要がある。従来、このような発話単位・機能の認定基準は研究機関ごとに別々に策定しており、研究者間で共有できていない。

筆者らは、平成 20 年度から科研費基盤研究 (B)「対話における発話単位と機能の認定に関する研究」を開始した。このプロジェクトは、対話において、文や発話に相当する単位とそれが担う機能を、揺れの無い明確な手続きによって認定する基準を策定し、公開することを目的としている。その第一歩として、伝ほか (2008) は、統語・韻律・語用論という異なる観点から認定された発話単位の相互関係を分析し、どのような言語的特徴が対話研究にふさわしい発話単位を規定しうるのかを考察した。

この分析のための単位認定の過程で、「うん」「えっ」「なるほど」「すごい」などの短い表現をどのように扱うかが問題となった。これらは広い意味でのあいづち表現であり、発話者が発話権を取得するものではない。そこで、これらを通常の発話単位から区別し、独自の基準で認定する必要がある。日本語ではとくにあいづち表現が多く、その認定基準を策定することは、対話研究における重要課題の 1 つである。

本稿では、筆者らが策定した日本語あいづち表現の認定基準とその問題点について報告する。

### 2 先行研究

メイナード (1993) によると、あいづちとは、「話し手が発話権を行使している間に聞き手が送る短い表現」である。ここでは、あいづちの形態（短い表現）と出現位置（話し手が発話権を行使している間）がキーとなっている。これらに関して多くの先行研究が存在する。

言語学の分野においては、田窪・金水 (1997) が話し手の心的な情報処理過程を聞き手に通達するものとして、応答詞・感動詞を取り上げている。このうち、本稿でいうあいづち表現に該当するものが「入出力制御系感動詞」として扱われ、非網羅的ではあるが、心的入出力に伴う標識として形態が示されている。

堀口 (1988) は、聞き手の言語行動としてのあいづちについて、日本語教育における利便性から、機能と形態を分けてとらえ、機能を「聞いている」「理解」「同意」「否定」「感情表出」の 5 つに、形態を「相づち詞」「繰返し」「言い換え」の 3 つに分けている。その際、機能を分類した上でそれらがどのような形態で表わされるかを提示しているが、このような機能に基づく分類は主観的判断になりがちであり、また網羅性に欠ける。

Clancy et al. (1996) は、日本語のあいづちに当たるものを拡張して、英語・日本語・中国語会話における reactive token を認定し、分析している。彼らは、reactive token を、相互行為上の機能と表層形式の両軸を用いて、backchannel, reactive expression, collaborative finish, repetition, resumptive opener の 5 つに分類している。また、連鎖構造上、応答の位置にくるものは最初から対象外としている。これらのアイデアは、本稿におけるあいづち表現の認定基準のヒントとなっているが、その認定手続きは明確であるとは言い難い。

会話分析の分野において、Gardner (2001) は、従来研究におけるあいづち類が、continuer, acknowledgement,

change-of-state token, assessment, non-verbal response の 5 種類の response token ( RT ) に集約できるとしている。彼はとくに、continuer ( *Mm hm/Uh huh* ) acknowledgement token ( *Yeah/Mm* ) newsmarker group ( *Oh/Right* ) change-of-activity token ( *Okey/Alright* ) の 8 つの RT について詳述している。これらは相互行為上の機能を重視した分類であるが、英語のみを対象としているため、日本語のどの形態がどの機能に対応するかはわからない。

会話分析における RT 研究の特徴は、個々の RT 自体の形態と機能を分類するのではなく、それらが話し手のターンの中でどのような位置でどのような要素を反応先にして生じたかなど、連鎖組織化上の役割を重視している点にある。本研究では、このような RT 研究を参考にして、あいづち表現の出現位置に関する情報を重視し、従来のあいづちの範囲を拡大しつつも、主観的判断に陥りがちな機能に関する判断を極力排除したあいづち表現認定基準を策定した。

### 3 あいづち表現認定基準

#### 3.1 概要

前節でみたように、あいづち表現の認定においては、該当する形態を明確にすること、出現位置を考慮することの 2 点が重要である。そこで、以下の方針にしたがって、あいづち表現の認定を行なった。

1. まず最初に、あいづち表現の形態を明確化し、表層形式が該当するものすべてをあいづち表現候補として認定した。
2. さらにその後に、連鎖上の位置の観点から不適切な候補を認定対象から除いた。

これらにより、客観的かつ明確な手続きで、会話データ内のあいづち表現を網羅的に認定した。以下、認定基準の詳細について述べる。なお、以下の事例において、‘/’ は語用論単位境界 ( 伝ほか, 2008 ) を示す。

#### 3.2 表層形式

瀬戸口・高梨・河原 (2008) の基準を参考にして、表層形式に基づいた以下の 6 種類のあいづち表現候補を認定した。なお、終助詞「か」や上昇調などによって、相手に働き掛けているものは認定対象としなかった。

応答系感動詞 ( B ) 承認や受容を示す感動詞による反応で、「ああ」「うん」「ええ」「おお」「はあ」「はい」「ふん」など ( 2 つ以上繰り返されたものも含む )。ただし、「あー」「おー」のように 2 モーラ目が長音で表記さ

れたり、「はーい」「ふーん」のように途中に長音を含んだりすることがある。

C: い/自分が説明したのに:/[もう一回=  
B: [うん/B <-  
C:=説明させられたりと[か:/  
B: [うんうん/B <-

感情表出系感動詞 ( E ) 驚き・感心や気づきを示す感動詞による反応で、「あっ」「えっ」「おっ」「へえ」など ( 2 つ以上繰り返されたものも含む )。ただし、「あ」「お」のように促音のない形で表記されることがある。

C: あれんなんか NHK の出口調査みたいな/  
A: へえ:/E <-

B: かなり気まずかった[ね/でも<?>/  
A: [え/E歌ってる声聞かれたの/ <-

語彙的応答 ( L ) 同意を示す慣用的表現による反応。「なるほど」「確かに」「そう ( ですね )」など。

B: まあみんな技術者でしたね/  
A: うーん/Bなるほどね/L <-

繰り返し ( R ) 他の話者の発話の一部、もしくは全体を繰り返す反応。ただし、相手発話中にない助詞などを付加しているものは除く ( 次例の「レプリカなの」 )。

A: ほう/でそのレプリカとか売ってる[って/  
B: [レプリカ/R <-  
C: [レプリカなの/

補完 ( C ) 発話されていない他者の発話の要素を予測し補うように発話する反応。他者の発話の先に続けるように発話されるものをさし、以下の例のように両話者の音声重複する場合もある。

A: きっと: 凄いいっぱいいっぱい勉強してるんですね/  
B: うーん/B\*2 えうすすうでなければ[いけない/  
A: [いけない/C <-

評価応答 ( A ) 他者の発話内容に対しての評価的語彙 ( 主に形容詞・形容動詞 ) を用いた反応。「おもしろい(な)」「すごい」「こわ」など。

B: え/Eミルクも(0.14)ぶわあつって=  
B:=で(0.34)出てくんのよ:/  
C: 超いい:/A <-

### 3.3 出現位置

あいづちは、「話し手が発話権を行使している間」になされる反応である。よって、質問に対する返答など、通常のターンを構成する発話はあいづち表現の認定対象から除くことにした。そのため、前節の基準で認定したあいづち表現候補に対して、隣接ペアの第2部分・第3部分 (Schegloff, 2007) に当たるものには出現位置に関わるラベルを付加した。これらの付加ラベルを持つ発話は、あいづち表現とは認定しない。

第2部分(\*2) 質問や依頼などの相手発話に応答する発話

A: E [棟の知ってる:/あのコーヒーマーカー/  
C: [ばえ-/  
C: うんうんうんうんうん/B\*2 <-

第3部分(\*3) 第2部分に後続する、承認や評価を表わす発話

A: ベランダとか[は/  
B: [ベランダはない[です/  
A: [ない/R\*3 <-

## 4 問題点

前節の手続きで実際の会話データに対してラベリングを試行した。対象データとして、伝ほか (2008) の分析データを4倍に増やしたもの (雑談・インタビュー対話各4対話、各5分間、計40分) を用いた。その結果、以下のような問題点が判明した。

### 4.1 表層形式の認定に関する問題点

あいづち表現候補を表層形式で認定する段階で以下のような問題点があった。

フィラーとの区別 フィラーとは、「あのー」「えーと」などの言い淀みであり、相手とのやり取りの中で語用論的機能をもつあいづち表現とは根本的に性質が異なる。しかし、「あ」「え」などの表層形式はフィラーにも応答系・感情表出系感動詞にも該当するため、区別しづらい事例が散見された。それらについては、原則として、韻律と文脈を利用してラベリングを行なったが、それでも判断のつかない場合があった。以下の事例では、3行目の「あ」は感情表出系感動詞、7行目冒頭の「あ」はフィラーとして認定した (発話冒頭のフィラーは独立した単位とはしない)。

C: でもなんかネオナチみたいなのが=  
C:=[怖いと [か言って/  
B: [あ/E最き[ん/ <-  
A: [か/  
C: <笑>  
(0.34)  
B: あでもね:(0.18)あの:(0.26)北(0.7)えーと=<-  
B: =元の東の方[(0.6)にやっぱり(0.14)たくさんいる/  
C: [うん/B

「あ」の分類 「あ」を含むあいづち表現には、「あ」「あっ」「あー」「ああ」など書き起こし上の類型が多数ある。これらは、フィラーとの区別も難しいうえ、応答系感動詞と感情表出系感動詞の間の区別も困難な場合があった。以下の事例の前者は応答系感動詞、後者は感情表出系感動詞として認定した例である。

C: うちの醗酵足りなかったのかな/なんか=  
C: =とろんとろんしてたよ/  
A: あ/Bほ[んと/Lうちなんか(0.27)やり過ぎ/ <-  
B: [あー/B

B: うち食べ終わってから牛乳足して/一晩=  
B: =置いているからさ:/  
C: うんうんうん/Bあ/Eそんならい=<-  
C: =やん[なけむ無理なのかな/  
A: [そうだよね:/L

感情表出系感動詞の「あ」は、Heritage (1984) のいう状態変化子 (change-of-state token) に類似しており、英語の *Oh* に対してなされた、連鎖上の位置による分類が参考になるかもしれない。ただし、日本語の「あ」と英語の *Oh* がどの程度対応しているかなど、慎重な検討を要する。

### 4.2 出現位置の認定に関する問題点

出現位置によってあいづち表現をフィルターする段階でも以下のようなさまざまな問題点があった。これら出現位置に関わる問題を持つ事例については、改めて「\*0」の付加ラベルを与えた。

自分の発話への反応 自分の発話を始める前に、前触発的に反応していると考えられる事例があった。

B: 怖いってゆのもあったのかもしれないん=  
B: =ですけど/どっかで/  
B: [<笑>  
A: [へー[:/E  
B: [そう/L\*0(0.34)凄いききたかったら/= <-  
B: =きっとね行ったと思うんですけどね/

B: 六人ぐらい座ってお茶しててさ:  
 C: あー/B そうなんだ:/L  
 B: うん/nB\*0 ; 以下の「反応先があいづち表現」で議論  
 (1.2)  
 A: そうそう/nL\*0 あのコーヒーメーカー= <-  
 A: =すごいよね/メーカー/

これらは、すでに生じた他者の発話への反応ではなく、発話権をとるため、もしくは、発話内容の思い出しのために、自発話の冒頭部分に挿入したものととらえられる。これらは、他者への反応でないため、あいづち表現とは認められないが、隣接ペアの第2部分・第3部分でもないため、前節の認定方式では排除できない。

第三者の反応 3人以上の会話においては、ある話者が反応すべきところで第三者が反応する場合がある。

A: まじで?/  
 B: うん/B\*2  
 C: へえ:/E\*0 <-

このCの反応は、隣接ペア第2部分の直後であり、第3部分の位置である。しかし、第3部分は本来、第1部分の発話者であるAがなすべきである。そのため、このCの反応は、たんなるあいづち表現として発話された可能性もある。このような事例をあいづち表現に含めるかどうか、今後検討する必要がある。

反応先が不明確 笑いが連続したり、間が空いたりした後に、あいづち表現の表層形式に該当する反応が見られる事例が散見された。

A: だじゃれ好きだよな:/[<笑>  
 B: [好き[だよな:/R  
 C: [<笑>  
 (0.8)  
 B: <笑>  
 C: ね:/L<笑>  
 B: <笑>  
 (1.7)  
 A: すか/  
 B: [うん/B\*0きのうびっくりだったよ/ <-  
 C: [へえ:/E\*0 <-

これらは、話題の切れ目などで、文脈の流れ全体に対してまとめた役割をもつと考えられ、反応先を一意に定めることができない。これもあいづち表現に含めるかどうか、検討が必要である。

反応先があいづち表現 あいづち表現の反応先自体があいづち表現である場合が多く見られた。

B: 六人ぐらい座ってお茶しててさ:  
 C: あー/B そうなんだ:/L  
 B: うん/B\*0 <-

最初の2発話が隣接ペアではないため、Bの「うん」は第3部分には該当しない。あいづち表現を「話し手が発話権を行使して」行なった発話に対する反応と考えるなら、この「うん」をあいづち表現とは認めにくい。この問題に関しては、あいづち表現の反応対象とは何か、という問題について考えなければならない。

## 5 おわりに

本稿では、対話におけるあいづち表現の認定基準とその問題点について述べた。問題点については、いくつかのパターンに整理することができたと考えている。今後、これらの問題点を解消するために、あいづち表現の範囲をより明確にし、あいづち表現として認定すべきものとそうでないものを明確に区別するために、認定基準を洗練させていきたい。

謝辞 本研究は科研費補助金基盤研究(B)「対話における発話単位と機能の認定に関する研究」からの助成を受けています。

## 参考文献

- Clancy, P. M., Thompson, S. A., Suzuki, R., & Tao, H. (1996). The conversational use of reactive tokens in English, Japanese, and Mandarin. *Journal of Pragmatics*, 26, 355-387.
- 伝康晴・小磯花絵・丸山岳彦・前川喜久雄・高梨克也・榎本美香・吉田奈央. (2008). 対話研究にふさわしい発話単位の認定に向けて. 人工知能学会研究会資料, SIG-SLUD-A802, 27-32.
- Gardner, R. (2001). *When listeners talk*. Amsterdam: John Benjamins.
- Heritage, J. (1984). A change-of-state token and aspects of its sequential placement. In J. M. Atkinson & J. Heritage (Eds.), *Structures of social action: Studies in conversation analysis* (pp. 299-345). Cambridge: Cambridge University Press.
- 堀口純子. (1988). コミュニケーションにおける聞き手の言語行動. *日本語教育*, 64, 13-25.
- 泉子・K・メイナード. (1993). 会話分析. くろしお出版.
- Schegloff, E. A. (2007). *Sequence organization in interaction: A primer in conversation analysis I*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 瀬戸口久雄・高梨克也・河原達也. (2008). ポスター会話における聞き手反応のマルチモーダルな分析. 人工知能学会研究会資料, SIG-SLUD-A703, 65-70.
- 田窪行則・金水敏. (1997). 応答詞・感動詞の談話的機能. 音声文法研究会 (編), 文法と音声 (pp. 257-279). くろしお出版.